

“帮忙你”は誤りか ——語史的観点から見た離合詞“帮忙”とその周辺——

伊 原 大 策

1.1

中国語教育の現場において、日本人の誤り易い例としてしばしば離合詞が取り上げられる。なかでも“帮忙”はその典型の一つとされ、動賓構造であるがゆえに“帮忙你”は誤りであり“帮你(的)忙”と言わなくてはならないとされる。同じ理由でその繰り返し型は“帮忙帮忙”ではなく、“帮帮忙”でなければならないと懇切丁寧な指導が行われる。

ところが、実際に用いられる中国語を少し注意深く観察すれば、誤っているはずの“帮忙+O”という表現に出くわすのは必ずしも稀でないことに気づく。実際の会話の際に時として確認できるこの種の表現は、それが発せられたその場で直ちに聞き咎めると、中国人はしばしば「少し口がすべっただけ」と弁解する。“帮忙+O”や“帮忙帮忙”が非標準的なものであるという意識は、少なからぬ中国人に存在するものと見える。しかし慎重に言葉を選び、推敲を繰り返した後に発表されたであろう文学作品にすらかうした表現を認めることができるのは、いったいどうしたことであろうか。例えば、北京語の名手と賞賛される大作家さえもが「日本人くさい誤り」を犯すのである。

①虎妞乐得的帮忙朋友，而且可以多看些…(老舍1937《骆驼祥子》17)(虎妞はうまい具合に友人を手伝えるし、おもしろいものまでよけいに見ることができ…)¹⁾

また最近の文法研究の専門家の中にも、“帮忙”は動賓構造動詞であると述べる一方で、次のような場合には“帮忙+O”が可能であると認定する立場がある。

②帮忙妈妈作家务。(王学作1988《動賓結構離合動詞淺析》)²⁾(お母さんを手伝って家事をする)

“帮忙”が動賓構造を内包する動詞である以上、これが連動式(“帮忙”+V)を構成した場合も賓語を従えることはできないはずである。しかしこうした表現を運用する中国人はこの専門家に限ったことではない。おそらくこの表現に

対する許容度は高いのであろう。

“帮你忙”と表現されるか“帮忙你”と表現されるかは、これが動賓構造動詞として認識されるか、それとも動賓構造以外の複合動詞として認識されるかという問題に帰結することは言うまでもない。しかしながら自明とされるこの問題には、地域及び時代による差が少なからず存在するらしいのである。言語を観察する際、こうした「口がすべった」（あるいは「筆がすべった」）表現こそが大きな暗示を与えてくれることがある。そこで小論は、これら「言い誤り」の現象に注目し、語史的な観点から“帮忙”の変遷過程を跡づける。このことによって離合詞が持つ問題の一端を明らかにし、その周辺の問題にも検討を加えること試みる³⁾。

2.1

“帮忙”は現代語において高い使用頻度を持ち、教学の場でも重視される基本単語のひとつである。しかしこの語は歴史的には新しい語であるらしく、この語を明代白話小説から見出すことは難しい。明代の白話では、「助ける・手伝う」という意を表現する時、“帮”が単独で動詞として使用されるか、または“帮助”や“帮扶”“帮衬”などの同義複合動詞が使われることが多い。例えば

③有什么难处。我帮你便了。(《水浒传》25)(別に難しいことはありません。手伝ってあげますよ。)

④犹恐有失，便分人去帮助曾魁。(《水浒传》68)(それでも失敗するかもしれないので、人をやって曾魁を助けさせた)

⑤好时不直得帮扶我们，临死却来思想，可不扯淡。(《醒世恒言》35)(元気な時にはちっとも私達を助けてくれず、死に際になってから思い出すなんて、冗談じゃないや)

⑥相公肯如此帮衬小人，小人万幸。(《初刻拍案惊奇》39)(あなた様がかくの如く私めにご助力下さるとは、光栄に存じます)

「助ける・手伝う」の意を示すものとして、こうした“帮～”型動詞の他に、“帮忙”という動詞を挙げることができる。

⑦那时李铭日日假以孝堂帮忙，暗暗教李娇儿偷转東西与他，掖送到家。(《金瓶梅》80)(その頃李銘は毎日仏間で手伝いをするにかこつけて、こっそりと李嬌児にものを盗み出させ、腋に抱えて家へ持ち帰った)

⑧叫了庄上的婆娘都来帮忙，发面做馍馍。(《醒世姻缘传》21)(村の婦人達に手伝わせ、小麦粉を発酵させてマントウを作った)

このように、明代～清初の白話小説には“帮忙”という語は出てこない。代表的な明清白話小説を調査の対象とする限りにおいて、“帮忙”が姿を現すようになるには、清代中頃の北方系作品まで待たなくてはならない。

⑨宝玉毎日便在惜春那边帮忙。(《红楼梦》45)(宝玉は毎日惜春のもとで手伝いをした)

《红楼梦》庚辰本の評者はこれに相当する部分について、“自忙不暇又加工一帮字，何笑可笑，所谓春秋笔法”と述べている。“帮忙”という語に春秋の筆法を読み取ろうとした評者には、この語は目新しい語として映っていたのであろう。“帮忙”は、清代前半の北方においてようやく誕生した新語に違いない。

2.2

清代北方では、現代標準語に直接継がなる新語の発生が時として確認できる⁴⁾。新しい語が誕生し、それが白話小説の言語に取り入れられ普遍化するだけの環境が整っていたのであろう。“帮忙”もそうした新語の一つと見ることができる。

新語誕生のメカニズムは興味深い問題であるが、そこには偶然による要素が多く存在するため、その成立の契機を求める試みはしばしば徒労に終わる。しかし形態や機能の点で類似した語が発生する場合、関連語との間に相互作用が生じることも期待できるはずである。そこで、“帮忙”が清代に至っていきなり成立した背景を探るため、「助ける・手伝う」という意を示す二音節動詞をいくつか選び、明・清白話小説における分布を観察することにする。

「助ける・手伝う」の意味を持つ動詞の分布

	帮助	帮衬	帮扶	帮手	帮忙	帮忙
《西遊記》	少	少	0	0	0	0
《金瓶梅》	少	少	多	0	0	2
《続金瓶梅》	0	多	少	0	0	1
《醒世姻缘伝》	多	少	少	0	0	18
《儒林外史》	少	多	0	0	0	0
《红楼梦》	少	少	少	0	2	0
《品花宝鑑》	0	少	少	0	3	0

（注：この表で扱う“帮手”は動詞としての用法を指す。
重要な用例以外は「多」(数例以上)、「少」(数例程度以下)で示した。）

上の表を観察すると、数例の「手伝う」の意を示す語のうち、“帮忙”と“助忙”の二語が、地域性と時代性において明瞭な偏在を示すことが知られる。この両語は北方系作品においてのみ確認でき⁵⁾、且つ“助忙”が衰退を示すと同時に“帮忙”が姿を現わしている。さらに“助忙”が動賓構造であった点も見逃せない。

⑩俺每做了这一日活，也该你来助助忙儿。(《金瓶梅》76)(私たちは今日の仕事をやるのだから、あなたも来て少しは手伝ってもよさそうなものだわ)

⑪叫你进来助忙，连这等的忙难道都教你助了不成？(《醒世姻缘传》19)(あなたに手伝いに来てもらおうといっても、まさかこんな手伝いさえあなたにしてもらわなくちゃならないの)

“助忙”の後を受けるかのように勢力を伸ばした“帮忙”は、同様に明確に動賓構造としての特徴を示し、分離することができる。

⑫…太太也在这里，叫他来帮个忙儿。(《红楼梦》46)(奥さんもここにおいでなので、あの人を呼んで手伝わせるように)

“助忙”と“帮忙”との間に認められるこうした類似性は、両者の間に密接な関係が潜んでいることを暗示する。もとより“助忙”の“助”と“帮忙”の“帮”は同義語であり、そのため“助”と“帮”は複合語の中において交代が生じるのは自然なことであろう。事実、類似した二語の間で“助”と“帮”が置換可能であった前例が存在する。例えば“助功”と“帮功”がそれである。

⑬师父，不须你助功。(《西游记》33)(お師匠様、ご助力には及びません)

⑭是我们不曾叫他帮功。(《西游记》34)(私たちはあの人に手伝ってくれと頼んではいません)⁶⁾

“助功”と“帮功”は共に動賓構造動詞であるから離合詞としての姿を示す。

⑮我如今助他一功。(《西游记》6)(今、ちょっとあの人に手を貸しましょう)

⑯你可去与他帮帮功。(《西游记》29)(あいつをちょっと助けに行くがよい)

このように“助～”型動賓構造動詞と“帮～”型動賓構造動詞は同義語として同一作品内で同時に使用されたことがある。

“助忙”と“帮忙”との間に存在する形態上・機能上の共通点、及び上の表に認められる特異な偏倚は、両語の間の継承関係を示唆していると考えられる。

以上から、文学言語としての“帮忙”誕生の過程として次の推測が成り立つ。すなわち、“助忙”は、文字どおり「忙しさを助ける」という意味を持つ語として、明代中期の北方語に存在していた。この語はそのまま北方でのみ発達を続け、清代初期に至っても用いられた。しかし、間もなく“助”の同義語として

の“帮”が“帮忙”の中に取り込まれ、北方で“帮忙”という新語が発生した。その後“帮忙”は“帮忙”にその席を奪われ、急速に衰退を示し、文学作品の舞台では“帮忙”が優勢を占めるようになった。

2.3

こうした現われた“帮忙”は、やがて《品花宝鑑》に受け継がれることになる。

⑰那两个老婆子抬了食箱，六珠婢也拿了零碎物件，还有二龄及珊枝帮忙，送到留仙院后一一布置了。（《品花宝鑑》41）（その二人の婆やは岡持を持ち、六珠はこまごまとしたものを持ち、金齡と玉齡の二人、そして珊枝が手伝って留仙院の後ろに一つ一つ置いた）

⑱子云去请了张仲雨来帮忙，管了帐房，并指点铺设一切。（《品花宝鑑》52）（子云は張仲雨に手伝いに来てもらい、帳場の仕事を任せ、一切のしつらえも指図させた）

“帮忙”が北方において定着する様相を示すと、それがまもなく南方でも受け入れられ始める。北方地区のみに方言として踏みとどまっていた“帮忙”と異なり、“帮忙”は共通語への道を歩み始めたのである。清末の下江官話を反映する《官場現形記》には、多くの“帮忙”が採用されている。

⑲职道把大人盛意通知了他，料想他亦是一定肯帮忙的。（《官場現形記》18）（私めがあなた様のお考えを彼に知らせれば、きっと彼も手伝うに違いありません）

《官場現形記》の“帮忙”は離合詞としてしばしば分離する。

⑳就是庄黄两人，兄弟亦自有帮他们忙的地方。（《官場現形記》17）（荘さんと黄さんの二人については、私はもちろん彼らの手助けを致します）

㉑我兄弟年纪大了，有些事情怕心烦，总要诸位费心帮帮忙。（《官場現形記》31）（私は年がたってしまい、少しばかりおっくうなので、皆様には心にかけてお手伝い願いたい）

《官場現形記》においては59例の“帮忙”が使用され、そのうち17例が分離して用いられている。北方系の新語を採用するに当たって、南方系方言を話す作者は本来の用法をそのまま受け入れたものと見える。

3.1

ところが《官場現形記》からわずかに三十年ばかり経過して成立した巴金の作品では

②德，帮忙我吧。(《愛情三部曲》〈雷〉6)(徳さん、私に手を差し伸べて下さい)

③我愿意尽力帮忙她。(《愛情三部曲》〈電〉7)(私は全力で彼女を手伝いたいのだ)

このように、“帮忙”は動賓構造を持つ動詞として扱われていない。しかし、一方で同じ作品に離合詞としての用法も認められる。

④他不会帮你的忙吗？(《愛情三部曲》〈雨〉8)(彼はあなたを手伝ってくれませんか)

《愛情三部曲》では全体で26例の“帮忙”が使用され、そのうち動賓構造としての用法であると確認できるもの(“帮+O+忙”型または“帮帮忙”型)が1例、非動賓構造として使用されていると確認できるもの(“帮忙+O”型または“帮忙帮忙”型)が6例存在する。両者の用例の間には、機能上・修辞上の使い分けは認められない。したがってこの作品において、“帮忙”は動賓構造としての用法の他に、非動賓構造としての用法をも明確に持っていたと言える。

“帮忙”は民国に至って大きくその内部構造を変えつつあった。

小説冒頭で挙げた例文①“虎妞乐得的帮忙朋友”(《駱駝祥子》17)は、ちょうどこの時代の北方語の様子を反映したものである。《駱駝祥子》には、“她可以帮他的忙”(《駱駝祥子》8)や“你帮几天忙”(《駱駝祥子》13)など、離合詞としての姿を示す用例も6例存在し、老舎の言語においてもこの語の内部構造が不安定な状態にあったことが窺える。

老舎が《駱駝祥子》の筆を擱いた後も、“帮忙”は非動賓構造用法を持ち続けたと考えられる。というのは“帮忙”の非動賓構造用法を明示する信頼すべき資料は他にも存在するからである。例えば《岩波中国語辞典》は“帮忙”が分離可能な動詞であることを認めつつ、“他并没帮忙过我”と“他并没帮过我的忙”の両型を記載する⁷⁾。この辞典編纂のインフォーマントにとって、“帮忙”は動賓構造動詞でもあり、非動賓構造動詞でもあったと見える。したがって例文①(“帮忙朋友”)や例文②(“帮忙我”)の語法は、老舎や巴金が意図的に行った文学的修辞では決してなく、かつて中国に広く存在した語法であったと断定してよい。今からわずか四・五十年前の“帮忙”は、北方地区においても、非北方地区においても動賓構造から離れかけていたのである。

清末から現代にかけての“帮忙”の用法

	全用例数	動賓構造用法	非動賓構造用法
《官場現形記》1905年	59	17	0
《愛情三部曲》1935年	26	1	6
《駱駝祥子》1937年	14	6	2
《岩波中国語辞典》1963年	8	6	1

（注：「動賓構造用法」と「非動賓構造用法」との合計数が「全用例数」に一致しないのは、いずれの用法であるか確認できない例が少なくないためである。
《岩波中国語辞典》の「全用例数」は、“帮忙”の項目におけるもののみを計数した。）

本来の内部構造が見失われ、ある構造からそれ以外の構造へと移行するこうした現象は、動詞の変遷史の中で時に確認できるものであり、必ずしも珍しい現象ではない。例えば同義複合動詞“洗浴”は明代において“洗了浴”（「洗いを洗った」）という形式を出現させたことが確認できるし⁸⁾、現代語においても偏正構造動詞“后悔”は“后了悔了”（「悔やみを後に残した」）という形で用いられることがある⁹⁾。これらは、非動賓構造動詞が動賓構造動詞へと変化する第一歩を示す現象である。

ところが“帮忙”が民国初年に見せた動きは、これらの動詞が示した変化とは方向を逆にする。歴史的な観点から語の内部構造の変遷を観察した場合、非動賓構造動詞が動賓構造動詞へと変化する例が目立つ。“帮忙”は逆方向に向かって内部構造を変化させつつあったという点において、注目に値する。

3.2

ここで“帮忙”の歴史を簡単に振り返ってみることにする。

「助ける・手伝う」を意味する語として明代北方には動賓構造動詞“助忙”という語が存在した。この語は北方においてその後も引き続き使用されたが、遅くとも清代中期頃までには勢いを失い、新たに誕生した動賓構造動詞“帮忙”に優位を譲ることとなった。まもなく新語“帮忙”は急速に南方にも広まり、白話作品の標準的語彙としての地位を獲得した。

ところが民国初年には早くも新しい動きが“帮忙”に生じる。それは“帮忙”を動賓構造から引き離そうとする流れであった。その結果、“帮忙”には北方・非北方の差を問わず、“帮忙+O”型が出現するようになった。《駱駝祥子》に

現れる“帮忙朋友”や《愛情三部曲》に認められる“帮忙我”はその例である。“帮忙”はその後も引き続き非動賓構造としての特性を持ち続け、《岩波中国語辞典》によって“没帮忙过我”という表現が記録されることとなった。

しかし、現在の「標準語」においては大規模な実地調査を行うまでもなく、“帮忙”は、動賓構造として用いられるのが「普通」の姿であると認められる。したがって、“帮忙”は遅くとも1930年代頃には、非動賓構造としての傾向を強めたにもかかわらず、その後わずかな時間内に再び動賓構造としての方向へ大きく揺れ戻しを見せたことになる。

そこで思い起こされるのが、小論冒頭の例文②で挙げた“帮忙妈妈做家务”(1988年王学作《動賓結構離合動詞浅析》)である。王氏の言語においては、連動式(“帮忙”+V)を構成する際にのみ、“帮忙”が賓語を従えることが許され、それ以外の条件の下では、この語は動賓構造動詞として用いられなければならない。この矛盾した現象の成立を支えるものは、“没帮忙过我”(1963年《岩波中国語辞典》)という表現を許容する力と同じものであろう。両例文の間に共通して存在する条件は、述語部分が“帮忙”と賓語(常用される助詞“了”を伴う例を含む¹⁰⁾)によってのみ構成されたものではないという点である。非動賓構造から動賓構造へと揺れ戻した直後の“帮忙”は、雑多な要素を含む構造の中では離合詞としての機能を十分に発揮できないのであろう。ここには、極めて短時間内に動賓構造から非動賓構造へ、そして再び動賓構造へと目まぐるしく変化した“帮忙”の混乱した姿が反映されていると考えられる。

4.1

言語の変化には偶然性がつきものであるが、なんらかの必然性も伴うに違いない。言語は総体として一つの整合性を求めて変化を繰り返すものだからである。その際、変化を促す力としてしばしば観察されるものの一つは、類推による圧力であろう。事実、現代語においては、動賓構造の語が多数を占めるため、その影響力により動賓構造以外の動詞までもが動賓構造化する傾向の存在することが報告されている¹¹⁾。この力は民国初年から現在に至るまで同じように機能し続けたことであろう。中国語全体として見た場合、単語の内部構造という点で、この数十年間に大きな変化が発生したとは認め難いからである。

では、なぜ“帮忙”は、動賓構造化の流れに逆らって非動賓構造化の方向へと向かうことを試みたのであろうか。この現象の背景には何が作用したのであろうか。

この問題を検討するには、“帮忙”が誕生する際の過程を細かく観察してみる必要があろう。

表2.2 (『「助ける・手伝う」の意味を持つ動詞の分布表』) からわかるように、「助ける・手伝う」の意味を持つ動詞群において、明〜清代には“助〜”型動詞は一種類のみしか存在しなかったが、一方“帮〜”型動詞は種類が豊富で、使用される頻度も高かった。そのため、同義語の間における単語の形態による類推の力について言えば、“助〜”型動詞は“帮〜”型動詞の圧力を強く受けたに違いない。その結果、清代前半に“帮忙”は“帮〜”型動詞に吸収され“帮忙”が生じたものと推測される。この過程では、明代に“助功”が同義語の“帮忙”と互いに交渉を持った経験が生かされもしたことであろう(図4.1A 参照)。

こうして誕生した“帮忙”は形態的には“帮忙”と“帮助”(及びその他の“帮〜”型動詞)との混合したものであるが、品詞的には“帮忙”の後継であった。“帮忙”が動賓構造動詞“帮忙”の賓語部分を受け継ぐからには、少なくとも当初は、“帮忙”の動賓構造としての特性を継承しないわけにはいかなかったのである。

かくて“帮忙”は“帮〜”型動詞へと歩み寄った結果、意外な成果をも手に入れることになった。それは、北方特有の“助〜”型から離脱することで、形態的に全国型の“帮〜”型に加入することになった点である。“帮忙”はその“助”を同義同品詞の“帮”に変えることで全国に共通する形態を身に付け、新たな生命力を得た。“帮忙”が急速に非北方系地区にも広く受け入れられ、白話作品における標準的語彙としての地位を獲得したのは、北方語の地位が清代において上昇したためのみではなく、この語の形態上の理由もあったためと考えられる(図4.1Aの右下部参照)。

やがて“帮忙”が新興の“帮忙”に駆逐され、言語の担い手から“帮忙”の記憶が失われ始めると、“帮忙”は新たな圧力に直面することになったであろう。“帮〜”型動詞のみが支配するようになった環境のもとでは、語の内部構造も他の“帮〜”型と同じくすることを求められるからである。“帮助”を始めとする同義複合動詞が“帮忙”に対して名実ともにその仲間に入ることを求めるのである(図4.1B 参照)。

ところが“帮忙”成立時と異なり、類推によって生じるこうした圧力には正反対の力も加わったはずである。それは、中国語に広く見られる動賓構造化への圧力である(図4.1C 参照)。かくして民国初年頃において“帮忙”は、“帮〜”型動詞が誘いかける同類派圧力と、動賓構造動詞が働きかける多数派圧力との

間で揺れ動いたことになる（図4.1D 参照）。北京語の名手とされる大作家が見せる「日本人くさい誤り」（例文①）は、こうした背景のもとで成立したものと考えられる。

現在の「標準的」な中国語においては、“帮忙”は動賓構造を持つ離合詞であると判断せざるを得ない。しかし例文②のように、“帮忙”がその後ろに賓語を従える用法がなお存在する事実は注目されてよい。中国語全体として見た場合、目下のところ、“帮忙”は動賓構造動詞による多数派工作が勝利を収めつつある最終過程に位置している。時として観察できる“帮忙+O”型の表現は、この変遷のなごりが瞬間的に見せる揺れ戻しの姿であると考えられる。こうして見ると、“帮忙”はきわどい瀬戸際で踏みとどまって、動賓構造としての姿を保持することにかろうじて成功したと言える。“帮忙”が動賓構造動詞であるというのは、決して自明の道理ではないのである。

図4.1A

“帮忙”の発生過程（清代前半）

（「手伝う」を意味する主要な同義語は“帮～”型と“助～”型のみという環境において）

“帮～”（“帮助”他）……全国型。種類が多く、使用頻度も高い

明代に“帮～”型（“帮功”）と“助～”型（“助功”）が同義語として同時に使用されたことがある

→類推の圧力→新語“帮忙”の誕生

“助～”（“帮忙”のみ）……北方型、種類が少く、使用頻度も低い

||
全国型の形態を持つ

↓
急速に全国に普及

凡例：→ 類推が働きかける対象・方向

→ 類推の機能と結果

図4.1B

動賓構造動詞“帮忙”から非動賓構造動詞“帮忙”への変遷過程（民国初年）

（「手伝う」を意味する主要な同義語はすべて“帮～”型であるという環境において）

“帮助”“帮衬”“帮扶”……いずれも同義複合構造

→類推の圧力→同義複合構造動詞“帮忙”の成立

↓
“帮忙”……“帮～”型複合動詞の中で唯一の動賓構造

図4.1C

非動賓構造から動賓構造へと変化を促す力が機能する過程

動賓構造動詞…複合語の中で多数を占める

↓
→類推の圧力→同義複合構造化しつつあった“帮忙”を動賓構造化

↓
動賓構造動詞以外の複合語

図4.1D

民国～人民共和国時期における“帮忙”をめぐる二つの圧力

同類の形態を持つ“帮～”型動詞が働きかける類推の圧力 多数を占める動賓構造動詞が働きかける類推の圧力
同類派の圧力 多数派の圧力
同義複合構造化 ← “帮忙” → 動賓構造化

5.1

さて、清代には“帮～”型動詞と“助～”型動詞との相互作用により離合詞“帮忙”が発生したと推測したわけであるが、類似の現象が人民共和国成立後も生じているものと考えられる。その例の一つとして“帮手”を挙げることができよう。

周知のように“帮手”は名詞ではあるが、動詞としても使用される。例えば
②⑨请你给我帮手。(どうぞ手伝って下さいな)

“帮手”という形態に注目するのであれば、この語は歴史の古い語であり、少なくとも明代以前から確認できる。ところが、伝統的白話小説で用いられる“帮手”はおそらくすべて名詞であり、動詞としての用法は存在しないと考えられる(表2.2『「助ける・手伝う」の意味を持つ動詞の分布表』の“帮手”の項目参照)。

②⑩那和尚原来还有一个帮手。(《西遊記》49)(あの坊主はなんとあとひとり助っ人がいたのだ)

②⑪你家事大，孤身无靠，又没帮手。(《金瓶梅》62)(あなたは家のことがたいへんなのに、一人暮らしで手伝ってくれる人もおりません)

②⑫有了这个帮手，我也可以歇歇了。(《官場現形記》58)(この助手がいてくれれば、私は一休みできるぞ)

このように“帮手”は、少なくとも清代に至るまでは文字どおり「手伝い手」であった。

実はこの語の動詞用法が公認されたものとして現れるようになったのはつい

最近であり、1978年修訂第2版の《現代漢語詞典》さえも名詞用法しか記載していない。中国で編纂された権威ある辞典に「手伝う」という意味の動詞用法が採用されたのは、管見に及ぶ範囲では1989年《現代漢語詞典 補編》からである。また、戦前の「国語」を受け継ぐ「台湾標準語」(台湾で通行する北京語)にも、「帮手」の動詞用法は現在もなお存在しない。しかし、1963年《岩波中国語辞典》には「帮手」の動詞用法の記載が見える。したがって「手伝う」という意味の「帮手」は、少なくとも北京では比較的早い時期に発生した用法であるとは言え、大陸全土で普遍化したのはこの二十年前後のことであると考えられる。「標準語」としての「帮手」という動詞は、人民共和国成立以後に誕生した極めて歴史の浅い新語である。

興味深いことに、この動詞は「帮忙」と同様に離合詞としての特徴を示す。

㊟劳驾, 请您过来帮把手。(商務印書館《現代漢語詞典 修訂第3版》)(すみません、ちょっと手をかしてください)

㊟请你帮帮手。(大修館書店《中日大辞典 増訂版》)(ちょっと手伝ってください)

「帮～」型の二音節動詞で離合詞として機能する動詞は「帮忙」のみである。そのため、新しい離合詞「帮手」の成立に、「帮忙」が深く関わったと推測することは合理的である。つまり「帮手」と「帮忙」との間における意味及び形態上の類似が、「帮手」の内部構造を変え、第一字を動詞に、第二字を賓語に変えたものと推測される。この変化の際には、日本語の「手助けをする」という表現が持つと同じ発想が機能したであろうことも見逃せない。

6.1

ところで、小論の題名で提起した問題に戻ろう。「帮忙你」は文法的に「誤った」表現なのであろうか。言うまでもなく、小論の目的はどれが正しくどれが誤っているかという不毛な議論を行うことではない。したがって離合詞における類推作用による「約定俗成」の過程を跡づけることができれば十分であろう。

既に示したように、「帮忙你」は歴史的に見ると、かつて(わずか約五十年前!)大きな流れとして中国語に広く存在したという意味において、紛れもなく「正しい」のであるが、「現代標準語」として見た場合は一般的でないという事実が存在する。しかし実は「台湾標準語」(台湾で通行する北京語)では、現代の若者によってすら「帮忙你」は常用され、「誤り」ではない。「帮忙」が動賓構造と非動賓構造との間で揺れ動く変遷の旅路は、北京の影響力を免れた南の宝島

でなおも続いているのである¹²⁾。“帮忙”が動賓構造から離れようとした力の強さを、ここにあらためて認めることができよう。

小論はこうした現象の背景に、“帮～”型動詞が“助忙”や“帮忙”に求める求心力と、動賓構造動詞が広く持つ類推による引力とが攻めぎあう姿の存在することを、明～現代の資料から読み取ろうとした。もとより単語の発生や変遷には、偶然の要素が少なくなく、たとえ必然性がそこに潜んでいても文献から直接読み取ることはできない。小論は、「手伝う」の意を示す語の歴史的変遷を辿りながら、明らかに存在するにもかかわらず等閑視されてきた“帮忙你”という表現に目を向け、その変遷過程に一貫して存在するひとつのパターンを見い出そうと試みた。

注

- 1) 引用部分の作品本文について、“乐得的”の“的”が衍字だという説はあっても、“帮忙朋友”が印刷ミスだという説は聞かない。主要テキスト間に異同もない。またこれが特殊な表現効果を狙った修辞であると理解することもできない。
- 2) 王学作1988、p147。
- 3) “帮忙”と同様、日本人が誤り易いとされる“洗澡”にも類似の問題が存在する。“洗澡”については拙論1998で別に考察する。
- 4) 例えば拙論1997、p141の指摘する“撒谎”。
- 5) 調査の対象とした作品のうち、《統金瓶梅》の言語については明確でない部分が少なくない。しかしこの作品の作者が山東地方出身であるという事実は確認されている。
- 6) “助功”や“帮功”の“功”はテキストや作品により、時に“工”と表記される。例えば《西遊記》における“助功”及び“帮功”の全用例のうち、世徳堂本は第34回の例のみ“帮工”に作る。一方、李卓吾批評本はこの部分を“帮功”に作る。引用にあたっては、表記を“帮功”で統一した。
- 7) 倉石1963、p16。
- 8) 拙論1998。
- 9) 倉石1963、p231。“后悔”の動賓構造としての用法は、現在の北京の若者の言葉にも観察することができる。
- 10) 非動賓構造動詞が動賓構造化する現象には、高い頻度で使用される“了”が深く関わっていると推測される。拙論1998。
- 11) 例えば湯1988、p53、王大新1988、p46など。
- 12) “帮忙”の非動賓構造用法が台湾において保存され続けている言語的背景については、別稿《離合詞と南北方言》を予定している。

参考文献

- 愛知大学中日大辞典編纂処1968 《中日大辞典》 燎原
 愛知大学中日大辞典編纂処1986 《中日大辞典 増訂版》 大修館書店
 伊原大策1997 〈明・清北方語の系譜〉 《地域研究》15
 伊原大策1998 〈“洗澡”考〉 《中国語学》245
 王学作1988 〈動賓結構離合動詞浅析〉 《世界漢語教学》3
 王大新1988 〈V-O 式動詞の類推作用和規範化〉 《語文建設》5
 倉石武四郎1963 《岩波中国語辞典》 岩波書店
 中国社会科学院1978 《現代漢語詞典》修訂第2版 商務印書館
 中国社会科学院1989 《現代漢語詞典 補編》 商務印書館
 中国社会科学院1996 《現代漢語詞典》修訂第3版 商務印書館
 湯廷池1988 〈為漢語動詞試定界說〉 《清華學報》18-1

本文引用に使用したテキスト

- 《水滸伝》 容与堂本影印 《古本小説集成》所収 上海古籍出版社
 《西遊記》 世徳堂本 天理図書館蔵本マイクロフィルム
 《醒世恒言》 金閨葉敬池本影印 ゆまに書房 1980
 《初刻拍案驚奇》 尚友堂本影印 ゆまに書房 1986
 《金瓶梅詞話》 大安影印 1963
 《統金瓶梅》 順治17年刊本影印 《古本小説集成》所収 上海古籍出版社
 《醒世姻縁伝》 同徳堂本影印 文学古籍刊行社 1988
 《儒林外史》 臥閑草堂刊本影印 人民文学出版社 1975
 《紅樓夢》 程甲本影印 書目文献出版社 1992
 《品花宝鑑》 幻中了幻齋刊本影印 《古本小説集成》所収 上海古籍出版社
 《官場現形記》 海南出版社（亜東本重印） 1995
 《駱駝祥子》 《老舍文集》3所収 人民文学出版社 1982
 《愛情三部曲》 《巴金全集》6所収 人民文学出版社 1988

小論は、1997年度「財団法人交流協会日台交流センター 歴史研究者交流事業」における『台灣標準語成立史に関する研究』の研究成果の一部です。関係者の方々にあつくお礼申し上げます。